

一関市
インドネシア訪問団
訪問記録

2026/10/４～2026/10/８







訪問目的等

市内の各事業所において人材不足が顕著となっており、今後外国人を雇用する事業所が増えることが見込まれる中、現在、就労のために来日するインドネシアの人々が増加傾向であり、人材確保において有望な国であることから、インドネシアの人材育成や生活環境、文化・宗教などについて理解を深め、市内事業所の今後の採用における参考とするため、訪問団を結成し訪問したもの。

訪問先の選定

令和８年６月２５日に開催した外国人材の採用を検討している事業所を対象とした「インドネシアについて学ぶセミナー」において、講師を依頼した日尼商事㈱総括部長の山倉宏矢氏から、日尼商事㈱が運営しているニチニ介護スクールのあるインドネシアのビマ市内において、今後日本への人材の送り出しの可能性が高まっているとの情報があり、山倉氏に人材確保の参考となる機関や施設などを提案をいただき決定したもの。

訪問団参加者

市長、市議会議長、商工会議所会頭や市内事業所の代表者など12人で訪問しました。

インドネシアの基本情報

※参考：外務省HP、国際連合人口部

面積	約192万㎢　（日本の約５倍）
国土	5,110kmと東西に非常に長く連なり、赤道にまたがる地域に1万7000を超える島嶼を抱える世界最大の群島国家
人口	約２.79億人（2023年インドネシア政府統計）
年齢構成	15歳未満：24.6%、15～64歳：68.1%（15～29歳：23.7%、30～34歳：7.4%）、65歳以上：7.3%
首都	ジャカルタ
言語	インドネシア語
宗教	イスラム教：87%、キリスト教：10.4%、 ヒンズー教：1.7%、仏教：0.7%
民族	約1,300 固有民族（ジャワ人、スンダ人、マドゥーラ人等マレー系、パプア人等メラネシア系等） 移民系民族（中華系、アラブ系、インド系等）
経済成長率	5.05%（2023年インドネシア政府統計）



ビマ市について



- ビマ市（Kota Bima）は、インドネシア・西ヌサ・トゥンガラ州のスンバワ島東部に位置する都市です。人口は約16万4千人（2024年）で、スンバワ島東部における行政、商業、サービスの重要な拠点となっています。
- 市の西側にはビマ湾（Teluk Bima）が広がり、豊かな自然環境とともに、歴史的・文化的な魅力を持つ地域です。ビマ地域は長い王国・スルタンの歴史を有し、現在も伝統文化や工芸が受け継がれています。
- 特に、色彩豊かな伝統織物「ビマ織り（Tenun Bima）」は、地域を代表する文化の一つです。現在では伝統文化を生かした観光や創造産業の発展も進められています。
- 日本からインドネシアの首都ジャカルタまでは、東京（羽田）を基準に約5,780kmです。今回訪問したビマ市は、広大な島嶼国家であるインドネシアの東部地域に位置し、独自の歴史、文化、自然に触れることができる都市です。

訪問行程

日時		行程
10月４日(日)	11:00～17:25（※）	移動（成田空港発　→　デンパサール空港着）　※日本時間は18:25
10月５日(月)	9 :35～10:35	移動（デンパサール空港発　→　スルタン・ムハンマド・サラフディン空港着）
	13:00～14:35	ビマ市役所訪問
	14:45～16:30	ニチニ介護スクール視察
	16:40～17:20	ビマ歴史館見学
10月6日(火)	8 :55～10:10	医療系専門大学の視察
	10:20～11:35	介護施設の視察
	13:30～14:50	工業高校視察
	15:20～16:00	２班に分かれて家庭訪問
	16:25～17:10	モスク見学
10月７日(水)	11:00～12:10	移動（スルタン・ムハンマド・サラフディン空港発　→　デンパサール空港着）
	15:00～16:00	在デンパサール日本国総領事館訪問　宮田勝利総領事と面会
10月８日(木)	0 :20（※）～8 :50	移動（デンパサール空港発　→　成田空港着）　※日本時間は1:20

ビマ市役所　　10月５日（月）13：00～14：35

- ビマ市長と一関市長のスピーチによる意見交換

相 手 方	ビマ市長、労働局長など関係者80名程度
概　　要	ビマ市長からビマ市における課題や今後の日本及び一関市との関わり方に関する考えについて、また、一関市長から今回の訪問目的や一関市における外国人材への対応状況などについて、スピーチを通じ意見交換を行った。
スピーチ内　　容	【ビマ市長】 ・　ビマ市滞在中に、ビマの人の人格、環境及び生活習慣などを知って行ってほしい。この訪問によって、一関市とビマ市との関係も良くできればと思う。 ・　ビマ市での問題としては、貧しいこと、無職の市民が多いことである。2024年では、89,000人くらいの労働人口に対し、86,000人しか仕事をしておらず、3,000人、3.37%が無職である。 ・　ビマ市では、これから、ビマの人に日本に興味を持ってもらい、日本で働きたいと思えるような施策をしていきたいと思うので、ビマの人が安心安全に日本で働けるように受け入れてほしい。 ・　2027年に政府のサポートが受けられればビマの人材を100人日本に行かせるようにしたい。ビマ市から、一関市に良い人材を送れるようにしたい。 ・　ビマ市側で日本に人材を送るだけではなく、一関市と教育の分野での生徒間交流、お互いの文化を学ぶ交流及び中小企業間の交流も実施したい。また、行政の課題として、ビマ市内のどこに行ってもゴミだらけであり、ゴミの収集方法について学びたい。 ・　この訪問が一つの大きなアクションになるように、皆さんの協力がほしい。 【一関市長】 ・　日本では人口減少が進んでおり、市内事業所では人材確保が大きな課題となっていることから、一関市では、外国人を雇用する事業者への支援に取り組むとともに、市内で暮らす外国人の皆さんが安心して暮らし、活躍できるような支援に取り組んでいる。 ・　現在、インドネシアから働きにいらしている方が増えていることから、インドネシアの皆さんのことについて理解を深めることが大切であると考え、今回、市内事業所の代表の方たちと訪問した。 ・　今回の訪問を、一関市とビマ市、そして両市の企業や地域の皆様との交流を深める大切な機会にしたいと考えており、特にも、インドネシアの皆さんが一関市に来て働く際に、安心して生活し、長く一関市で活躍していただける環境をつくるため、今回得た知識や経験を今後の取組に生かしていきたいと考えている。



ニチニ介護スクール　　10月５日（月）14：45～16：30

- ビマ市内にあるニチニ介護スクールを視察した。

相手方	校長、事務局長、教員、山倉氏ほか
概要	日尼商事㈱が運営している日本語学校の授業を視察し、生徒達の人となりや、どのように日本語を学び、どのくらいの日本語レベルで日本に来るのか、また、日本についてどのように考えているのかなどについて理解を深めた。
確認内容	・　介護スクールという名称で、介護を希望する人のカリキュラムもあるが、基本的には日本語教育を行っており、卒業後は様々な職種の日本企業で就業している。（介護希望は全体の１～２割程度） ・　多くの生徒は、オンラインなどにより、日本の企業と面接を行い、卒業後就労する企業が決まっていた。（名札に企業名が記載されており、一関市内の企業名もあった） ・　日本語と生活習慣トレーニングを行っている。 ・　生徒数は約100人。３か月ごとに30人程度が入学し、６か月で卒業。生徒のほとんどが、高校や大学を卒業し入学。 ・　ビマ市の生徒は全体の２割程度で、あとはロンボク島やスマトラ島などからの入学。ビマ市以外の入学者は別の教育機関で２か月程度日本語を勉強し、ニチニ介護スクールの面接に合格してから入学が認められる。 ・　ニチニ介護スクールは日本からの求人が多いので入学を希望する生徒が多い。 ・　スクールのスタッフは、日本語指導者、経理担当者、面接担当者など計18人。 ・　入校から卒業までの費用は１人約42万円。支払時期は入学時約５万円、面接合格時約19万円、認定証明書発行時約17万円。（ビマの平均月給は約３万円で世帯収入は約４万円） 　ただし、ビマ市出身の生徒については、入学金以外は、日本に行った後に10か月程度かけて分割で払い込みをしてもらうことも可能としている。（回収は出来ているとのことだが、手続きが大変とのこと） ・　卒業段階で日本語のレベルとしてはＮ４相当（日常生活で基本的な日本語が理解できる）を目指している。 ・　スクールの指導により、生徒はしっかりした挨拶ができており、一人一人活発的であった。 ・　日本で仕事をしたい理由を生徒に尋ねたところ、給料が高い、技術が高い、もともと興味があった、安全な国だと思うからなどの返答があり、日本に行くことについて、家族はどう思っているのかについても尋ねたところ、心配もあるが喜んでいるなどの返答があった。



ビマ歴史館見学　　10月５日（月）16：40～17：20

- ビマ市内にある歴史館を見学した。

概　　要	ビマの風土を学ぶため、旧ビマ王国・王宮を利用した歴史館を訪問し、ビマの歴史資料などを見学した。
特　　記 事　　項	・　視察中は、ビマ王国最後の国王のお孫さん（女性）にアテンドをしていただいた。 ・　展示品には金銀製品、馬具などもあり、金の産出や馬の生産など、一関とも共通する歴史があった。





医療系専門大学　10月６日（火）８：55～10：10

- ビマ市内にある医療系専門大学「ムハンマド・ダーラン高等職業教育機関」を視察した。

相 手 方	理事長、校長ほか
概　　要	市内において、医療系人材も不足していることから、医療系人材の学習状況の視察を行いつつ、学生への質問などを通じて医療系人材の日本での人材獲得の可能性について確認した。
確　　認 内　　容	・　４年制の助産師、麻酔看護師、保健師を養成する高等職業教育機関。 ・　学生は女性で学生数は254人。ビマ市とその周辺からの入学者が多い。 ・　学費は年間約10万円。 ・　卒業後、ニチニ介護スクールに入学し、日本に来る卒業生もいるとのこと。 ・　３教室ほど視察したが、40人ほどで授業を受けていた教室において、学生に日本で仕事をしたいかを尋ねたところ、８割ほどの学生が手を上げた。 ・　学生は礼儀正しく、また我々が質問したことについても、きちんと答えてくれた。





介護施設　10月６日（火）10：20～11：35

- ビマ市内にある高齢者向け福祉施設「メチ・アンジ」視察した。

相 手 方	所長や総務課長など
概　　要	介護施設での介護の状況を知るため視察を行った。
確　　認 内　　容	・　国が設置した施設で、ホームレスや家族から面倒を見てもらえない人などが入所。入居料は０円で、ビマ市内の人だけを受け入れており、食事や介護などを行い、亡くなるまで面倒を見るとのこと。なお、ビマ市のあるスンバワ島では介護施設はここだけとのこと。 ・　４つの建物に、現在42人が入居していた。（定員は50人） ・　基本的に一人部屋となっているが、建物も古く、衛生的とは言い難かった。 ・　50歳代から入居しており、現在は動けない入居者はいないが、認知症の入居者がいた。 ・　インドネシアでは、都市部には外資による介護施設が作られたりしているが、地方にはあまりないとのこと。 ・　一般的にインドネシアでは、高齢者の介護は家族が行うとのこと。





工業高校　10月６日（火）13：30～14：50

- ビマ市内にある工業高校「ビマ市第２国立職業学校」を視察した。

相 手 方	校長、副校長ほか
概　　要	一関市内で最も外国人材が働いている職種が製造業であることから、工業人材について知るため、ビマ市内の工業系の高校で、施設や授業風景を見学した。
確　　認 内　　容	・　自動車、電気、電設、バイク、溶接、化学、コンピューター、建設など12の学科がある工業系の職業学校。なお、入学後に学科分けが行われるとのこと。 ・　国立の職業学校で、３学年各学年300人で900人が在籍。７月入学し、６月卒業。なお、３年生は約６か月、職業体験があるとのこと。 ・　実習に使用する自動車の車体やエンジンなどは、日本の企業からの支援によるものとのこと。 ・　授業以外の時間で、２年次に本人の希望により日本語を学べる教室があり（現在の生徒数は35人）、日本で３年ほど鳶職をやってきたインドネシアの人が教えているとのこと。





家庭訪問（１班）　10月６日（火）15：20～16：00

- ビマ市内にある一般家庭を訪問した。

相 手 方	ニチニ介護スクールの生徒及び家族（１班は女子生徒宅で、本人とお姉さんが対応）
概　　要	ビマ市民の暮らしぶりを学ぶため、２班に分かれ、ニチニ介護スクールの生徒２名の家庭を訪問した。
確　認 内　容	・　家には、３つの部屋と台所があり、姉夫婦、甥２人と女子生徒の５人で暮らしていたとのこと。（部屋の数は２つか、３つが一般的とのこと。なお部屋の大きさは4.5畳程度だった） ・　女子生徒は、父母の家が小さいことから、2018年から姉夫婦の家で生活していたとのこと（現在はニチニ介護スクールの寮に住んでいる）。なお、兄弟は６人で３番目とのこと。 ・　地域の人とのつながりが強く、仲が良い。なお、訪問した際も、近隣の人たちが集まってきた。 ・　和歌山の介護施設に行くことが決まっているとのことで、日本に行くことに不安はないかを尋ねたところ、同じ介護施設にニチニ介護スクールから自分も含め４人で行くので不安は少ないとの回答だった。 　また、日本以外の国に行くことは考えなかったのか尋ねたところ、近くの人が日本の介護施設に３年行っており、日本しか考えなかったとの回答だった。







家庭訪問（２班）　10月６日（火）15：20～16：00

- ビマ市内にある一般家庭を訪問した。

相 手 方	ニチニ介護スクールの生徒及び家族（２班は男子生徒宅で、本人と両親が対応）
概　　要	ビマ市民の暮らしぶりを学ぶため、２班に分かれ、ニチニ介護スクールの生徒２名の家庭を訪問した。
確　　認 内　　容	・　玄関を入ってすぐの石畳（4.5畳程度）で面会。 ・　生徒の親からは以下のような話しがあった。 ◇　息子は日本に行きたいと前から言っていた。 ◇　日本の印象は、素晴らしいことと規律が高いこと。 ◇　自分たちは恵まれない家庭からスタートし、簡素な生活を教えられた。 ◇　息子にはあまり多くのことは求めていない。 ◇　故郷を離れ、一人でいるときに病気になったら傍に誰もいないこともあり、息子が日本に行く不安や心配はある。 ◇　息子には日本で真面目に仕事をして、意欲をもって取り組んでもらいたい。 ・　男子生徒からは、将来は家族と一緒に日本に住みたいとの話しがあった。







モスク見学　　10月６日（火）16：25～17：10

- ビマ市内にあるモスクを見学した。

概　　要	インドネシアの人の多くがイスラム教徒であることから、イスラム教と市民との関係についてモスクの見学を通じ学んだ
特　　記 事　　項	・　見学に訪れたものだったが、熱烈な歓迎を受け、イマーム（モスク代表者）、青年部長などが説明対応をしてくれた。 ・　モスクでは多くの市民がイスラム教について学んでいた。早い子では４歳くらいから、モスクでイスラム教について学ぶとのこと。 ・　市民とイスラム教はとても密接に関わっており、イスラムの教えを尊重しなければならないことを学んだ。 ※　お祈りの時間と思われるが、朝４時台～夜９時頃までコーランと思われるものが街中のスピーカーで流れていた。







在デンパサール日本国総領事館　10月７日（水）15：00～16：00

- 在デンパサール日本国総領事館を訪問し情報交換を行った。

相 手 方	宮川勝利総領事、中野江里子首席領事
概　　要	在デンパサール日本国総領事館からの依頼により訪問し、情報交換を行った。
情報交換内　　容	※　入館した際、受付対応者から、面会会場に、持ち物は持参できないとの指示があり、メモ等を持参しなかった。（後日、中野首席領事にそのことを伝えたところ、メモは持参しても良かったと謝罪あり） ・　はじめに参列者が自己紹介を行った後、宮川総領事から、一関市でビマ市を訪問した理由について質問があり、市長が説明を行った。 ・　外国人材の確保に際して、宮川総領事と中野首席領事から、ＣＩＲ（国際交流員：ＪＥＴプログラム等で自治体に配属される外国青年職員の職名。国際交流イベントの企画・運営、学校や地域での異文化紹介、翻訳・通訳などを行う）について情報提供があり、活用について提案された。（インドネシア関係では島根県美郷町が有名とのこと） ・　随行の日尼商事㈱総括部長の山倉氏から、ビマ市で資格試験を実施してもらえないかと要望をしたところ、宮川総領事から公正に試験ができる機関がないと難しいとの話があった。 

その他

- ビマ市についての所管

所　感　　・　きれいな景観のある街だが、空港からビマ市内のどこに行ってもゴミが大量に不法投棄がされていた。
・　ビマ市内は、若者も多く、また、朝市や夜の出店などもあり活気があると感じた。
・　行政機関、各教育機関や家庭訪問を通じて、日本への関心が高いこと、また、日本で働きたいと考えている若者が多いことからも、ビマの若者が、今後、日本へ来る可能性は高いと感じた。







総　括

(1)　行政

・　今回訪問したビマ市では、貧しいこと、無職の市民が多いことが課題と考えており、その解決方法の一つとして、市民を日本に送ることについて前向きであった。（来年以降毎年100人を日本に行かせるための施策を考えているとのことだった）

・　また、ビマ市側からは、日本に人材を送るだけでなく、一関市の生徒や中小企業との交流事業、一関市の行政（特にもゴミの不法投棄の解決施策）について学ぶ機会を設けてもらいたいなど、今後、一関市と交流を深めたいとの意向が示された。

(2)　学生

・　ニチニ介護スクールには３か月ごとに30人程度入学者がいることや、工業高校では日本語教室で毎年35人程度が学び、また、医療系専門大学では、多くの学生が日本で働きたいとの意向を持っているなど、潜在的に日本で働きたい若者が多いことが分かった。

・　工業高校や医療系専門大学を卒業してからニチニ介護スクールに入学している人もおり、職業的教育を受けた人材の確保もできることが分かった。

・　今回、訪問した教育機関における生徒や学生は、フレンドリーで非常に活発に活動していた。

・　一般的な家庭を訪問したが、日本の住居の方が衛生的であることが分かった。ただし、大家族や地域の人々とつながりが強い中で生活してきた若者が多いことから、日本に来た際、ホームシックにならないように、孤立しないような対策が必要と思われた。

(3)　宗教

・　イスラム教が、市民の生活と密接に関わっていることを実感できた。

・　イスラム教を信仰しているインドネシアの人を企業が雇用する際は、イスラム教の重要性について理解してもらい、尊重してもらう必要があると感じられた。

総　括

(4)　日本で受け入れる際の課題

・　来日したいと考えているインドネシアの人々の世帯では収入が低く、来日の際持参するお金も少ないことから、来日後、収入が安定するまでの間の生活支援。

・　インドネシアでは、大家族や地域の人々との繋がりが強い中で生活してきた人が多いことから、日本に来て、ホームシック又は孤立しないような支援。

・　インドネシアではイスラム教を信仰している人が多いことから、インドネシアの人を企業が雇用する際は、イスラム教の重要性を理解し、尊重してもらえるような対策。